
Under the Sun

takao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Under the sun

【NZード】

N5831E

【作者名】

takao

【あらすじ】

学校帰りに突然の雨に遭つた中学二年生の少女・翔^{かける}。誰もいない神社で、見知らぬ青年と雨やどりすることになつてしまい、何かされるのではないかと緊張していたが……。少女と青年のちょっとぴり問題提起?な初恋ほのぼのストーリー。（覆面小説家になろう参加作品です）

(前書き)

「覆面小説家になろう」企画様に提出した作品です（テーマは「雨」でした）。

ぜひ公式サイト様で他の力作をご覧いただけましたら幸いです！

はじまりは、梅雨の終わりの雨の日だった。

夏休みまであと一週間。帰りのホームルームで先生が、夏休み町内対抗子どもソフトボール大会の話をしていた。中学生となるとそういうものにも参加しなくなるが、積極的に参加するように、といふようなことを言っていた。

友達が眉を寄せて「かつたるいよねー、翔^{かける}」と私に囁いてきたので、つられて一緒に笑つてみた。

そんな話を最後に、三者面談でいつもより早く学校が終わつた昼下がり。今日に限つて一人きりの帰り道の途中、急に雨が降り始め、それはすぐに大雨となつてしまつた。

学校から家まで歩いて四十分。このまま帰ろうかどうしようか悩んだが、まだ十分ほどしか来ていない。私はとりあえず目の前にあつた神社の鳥居をくぐると、奥にある社の軒下に飛び込んだ。

私が屋根の下に入つた直後、雨は益々粒を大きくし、ぱたぱたと大きな音を立てて、屋根や地面に穴が開きそつなほど叩きつけてきた。

強引に帰らなくて正解だつた、と私がほつとした。その時。雨の音に足音がかき消されて気付かなかつたが、突然眼の前の人影が現われたので、私は思わず声を上げそうになつた。

軒下に駆け込んできたのは、Tシャツにジーンズ姿の男の人だつた。年齢は二十代といったところ。そして彼もまた、傘も持たず濡れていた。同じく雨やどりに来たのだろうか。人がいるとは思わなかつたのか、私を見てやや驚いた表情をしていた。

しかし雨は身動きがとれないほど酷く、結局その男の人も「雨、酷いな」と私から目を反らしながら言つと、同じく軒下に立つた。こうして私は、知らない男の人と雨やどりをすることになつてしまつた。

また。

「これで梅雨も終わりだからと、雨は白葉を起こしたように叩きつける。昼間だと言つのに辺りは夕方のようになに薄暗くなり、神社には誰も居ない。時折、鳥居の向こうの道路を車がざつと通り過ぎていく。」

私は段々、恐くなってきた。

杉の木に囲まれた、薄暗く人気の無い神社。春頃には不審者も通学路に現われた。雨で濡れた白いセーラー服も、透けてしまっていいかと心配になる。

「このお兄さんは変な人、じゃないよね……？」

今の時代、この田舎の町でも何が起ころか分からない。怪しいと思つたら声を掛けない、掛けられても答えない、逃げ出す事と母親に教えられている。隣の背の高い男の人をちらりと見上げ、密かに警戒しながら私はこれからどうしようか悩んでいた。

この雨の中走つて帰ろうか。でも変な人じゃなかつたら失礼かもしれないし……。

雨は弱くなる気配がない。彼がいつそ居なくなってくれないかと思つたものの、平日の昼間に私服でいるこの謎の男性は、そこを動きはしなかつた。

私は携帯電話を取り出し、仕事中の母親に電話を掛けた。祈るよう呼び出し音を聞いていると、意外にあっさりと繋がった。
神社に居ることを伝えると、丁度近くに居るので迎えに行く、と言つてくれた。私は胸を撫で下ろし、わざと彼に聞こえるように母親の言葉を繰り返す。

しかし安心して電話を切つた私に、突然その男性は話し掛けてきたのであった。

「家人、来るの？」

「え？ あ？ はいっ！」

急に声を掛けられて、私はそのまま何か変なことをされてしまうのではないかと、たじろいだ。思わずびくんと身体を揺らし少し後ずさると、ひっくり返った声で返事をする。

しかしそんな風に怯えた私に、逆に彼の方が驚いた表情をした。そして、深くため息をついた。

「ごめん。あやしい者じゃない」

失礼な想像をしていたことを知られてしまつた、と私が少し焦つていると、今度は彼の携帯電話が着信音を鳴らした。

「はい。　　あ、八幡神社のところで、ちょっと中学生見かけて、いえ、ただの雨やどりみたいです。保護者の方来るそ娘娘で。……そうですね、保護者さんが来次第、役場に顔出します、はい」私は彼が電話で話す様を目を瞬かせて見ていたが、やがて彼は電話を切ると、無愛想な表情でまた私を見下ろした。

「恐がらせて、ごめん。雨やどりでいきなり自己紹介もおかしいと思つて……言わなくて悪かつたが、役場の防犯係の職員の者だ。今日は代休だったんだが不審者情報が入つて、誤報の可能性が高かつたけれど、近所だしお前も暇ならパトロールしてこいと言われて。

それで出てきたらこの雨で、君が此処に一人で居た」

急には信じられなかつたが、その話が本当だとしたらこの男性は悪い人とは、逆の立場の人になる。つまり雨やどりで偶然出会つた私を心配して、傍に居てくれたらしいのだ。

確かに唐突に自己紹介されてもおかしい（言われても疑つたどうう）し、誤解して悪かつたかな、と素直に思うが、それでもやはり嘘かもしれないし……、と私が思つた時、車のクラクションが聞こえてきた。

いつの間にか弱まつてきた雨の中、鳥居の前に見覚えのある赤い車が止まり、中で母親が手を振つていた。

「お母さんだ」

思わずほつとした声になる。しかし、今度は母親にこの人が不審者だと思われてしまわないかと私はふと心配になつたが、彼は意外

にも母親と会釈し合つていた。

私は不思議に思いながらも彼にぺこりと頭を下げて、車へと走つた。

「陽君と一緒にだつたんだ」
車に乗るなり母親はそう言つた。

あの青年は、「津木さんのところの陽君」なのだと言つ。なんと彼は同じ町内に住んでおり、家が離れているので交流は殆どないものの、両親は赤ちゃんの頃から彼を知つてゐるらしい。彼は早くに両親を亡くし、今は育ててもらつた祖父の面倒を看ながら町役場で働く、まだ独身の二十五歳 だそうである。

近所の人つて知つていれば、あんなに怯えなかつたのに……と、私は勘違いした自分を恥ずかしく思うが、知つてゐる人や近所の人でも何をされるか分からぬ時代だから、仕方なかつたとも思う。未だに男の子に間違えられる髪の短い私でも、女の子なんだから、と母親は毎日のように口づるさく言うし、あんな場所に駆け込んだ私も無防備であつたと今更ながら思う。

私が悪いわけじゃない。でも「津木さん」も悪くない。

雨足は弱まつたものの、まだしつこく降つていた。しどしどと鳴る音が、部屋で一人で考える私の心をやけに、はやらせる。私を心配してくれたあの男の人のことが、彼に悪いことをしたと思つてゐるからか、何故か頭から離れなかつた。

次の日の朝。眼が覚めた私は、天氣を確認しようとカーテンを開けた。

雨は止んだものの、まだ空は曇つてゐる。窓の下をふと見ると、なんと土曜日の早朝だと言うのに、昨日の男の人が居た。私が驚いて覗き込むと、軍手をはめた彼は、黙々とゴミを拾つていた。

朝食の時に父親に尋ねてみると、今朝は町内のクリーン活動の日だつたらしい。各家庭から一人出なくてはいけないので、父親も参

加したと言つ。

しかしそれにしても、津木さんはまだおじさんじゃないのに、よくそんな面倒くさいことに参加するなあと、学校で部活をしている間、私はそんな捻くれたことを考えていた。

部活から帰ると回覧板に挟まっていたチラシを母親に渡され、それを持って一階へと上がった。

田舎の町は頻繁に何か行事がある。今度のチラシの内容は、昨日先生も話題にしていた、夏休み町内対抗子どもソフトボール大会のお知らせであった。

男女問わず、中学生も小学生の指導や選手として出場を、と書かれている。友達が「かつたるいねー」と言つたことを思い出し、私もそれに合わせなきやいけないと思ったが、あの彼がまた何か関わつているのではないか、ともふと思つた。

そしてチラシをよく見ると、案の定、会長名の下に監督として、「津木陽介」と彼の名前が書かれていた。

何故か私は気になつて、チラシに書いてあった練習日に地区のグラウンドへと行つてみた。

雨は止み、水溜りがまだ残つてゐるグラウンドから続く空は、青く、雲ひとつなかつた。

十人ほどの小学生が、グラウンドを走つてゐる。男の人の低い大聲が聞こえ、思わず首を竦めてそちらを見ると、ジャージ姿の彼がグラウンドの端に立つていた。

私の足が水氣を含んだ砂を踏む音に気付き、彼は私を振り返つた。

「この前は、ごめんなさい」

話し掛ける言葉が思いつかず私が第一声に謝ると、彼はまた驚いたようだつたが、無愛想な顔をふつと緩めた。だが、それは少し寂しそうにも見えた。

「別に。俺も小野さんの所の子だつて知らなかつたし。今の時代、

仕方ないだろ？信じていても、子供を裏切る大人がいるんだから

色々な嫌な事件を思い出し、私は頷いた。彼はそう言って私から

目を反らすと、グラウンドを走る小学生達の方を見た。今の複雑な

笑顔と子供達を見ている視線から、私は数日前から疑問に思つてい

たことを、口にせずにいられなかつた。

「この前のパトロールとか、こういうコーチとか、地域のこととか……、津木さんは、どうしてこういう事をよくしているの？」

予想もしていなかつたことを尋ねられたのか、彼はまじまじと私を見下ろしてきた。そして私の前に落ちていたボールに気付くと、それを拾い上げつぼそりと答えた。

「……子供の頃から、この町には世話になつてゐるからな。じいさんだつて今、周りの人に対する世話になつてゐる。だから何か返したいつてのもあるし、あと監督引き受けたのは……、子供の顔も覚えるためかな。それこそ、こんな時代だし」

学校で地域の繋がりが薄くなつてゐるという話をよく先生に聞かされるが、本当にそれを考えている人が現実に、しかもおじさんではなく若い男の人でいるとは思わなかつた私は、思わず彼に反論してしまつた。それは「格好悪いこと」だと私達は思つてゐるからだ。「でも、ひとりでこんなことしても、何も変わらないじゃん。それでも、悪い人はいるよ？」

彼は手の中のボールを見ながら、少し何か考えていたが、やがて口を開いた。

「そうだな。確かに俺一人、何かしても何も世の中変わらない。

でもあの時みたいな、雨やどりの時に見たような顔は、もう見たくない、と思う」

静かに答える彼の言葉に、私はどきりとした。それはあの雨の日に、私が彼に襲われるのではないかと怯えたことを指しているのだろ？

「あんな顔、子供にはさせたくない。俺に親が居なくとも、周りに育てもらつたように、子供には笑つていて欲しいと思う。こんな

事しても、何も変わらないけれど。こんな事しか　出来ないけれど」

津木さんはため息をついてそう言つて、その白球を青い空に高く真っ直ぐに投げた。

砂を零して、太陽の光の中に舞い上がるそれが、私にはやけに眩しく映つた。

そしてその白球は、戻つてくると大きな手にぱしんと音を立てて受け止められた。

その時、私の心中でも何かが大きな音を立てた。

自分一人で頑張つても、何も変わらないから。その姿を、笑われるから。そう思つて恥ずかしいと避けてきたことが、私の生きてきた十四年間にもたくさんあつた。

そんな恥ずかしいことを、一生懸命やつている人がいる。

なんて馬鹿げているのだろうか。なのにどうして、じとじとした雨空みたいな私の心と違つて、こんな晴れた青空がよく似合つよう見えるんだろうか。

彼はボールを持つて私を振り返つた。目と目が合い、そのボールが何気なく私に渡された。

その時、私は何か大切なものを受け取つた気がした。

格好悪いと思っていた筈なのに、どうしてこんなに気になるんだろうか。

とても恥ずかしかつたが、私はボールを握り締めながら俯き、ぽつりと呟いた。

「私も……ソフトボール、出よつかな……」

彼はまた驚いた顔をして、私を見た。だけど私自身が一番驚いていた。

どうしてだか私にはない、そのお日様みたいな彼の持つ何かが、
気になつて仕方がなかつた。

この日、梅雨明け宣言がされた夏の青空が、背の高い彼の上に広
がつていた。

(後書き)

この作品は企画で短編ということで、ただの初恋ものに留まらない
ように足搔いてみたりしました；

実は元ネタは長編で、子供球技大会ネタでした。中学生の女の子率
いる、少年野球チームの面倒をついつい見てしまうという青年の、
えろなし爽やかほのぼの話（昔はそういうのも書いていました…）。
いつか形にしてみたいものです。

（でもこのお話が「ハルハナノミ」の連載につながり、地区は違
うのですが同じ球技大会に参加するのだつたりします。）

ちなみに作者的にはこの後2人は仲良くなる予定です（もちろん十
年愛で、犯罪はなしの方向で（笑）

それでは、読んでくださいありがとうございました！

もしものもしもでコメントいただけます場合は、拍手メッセ（非
公開／ブログでお返事）、または作品最終ページの感想欄（公開／
感想欄でお返事）をご利用くださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5831e/>

Under the Sun

2010年10月8日15時36分発行